五代教主作 引出黒茶盌
［金竜海土・鉱泉鉄釉（月宮宝座松釉仕立て）］

題字 出口直日

通巻 第525号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
（IP）050-5510-9502
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

春の花秋のもみぢの妙なるも
神のすさびの錦なりけり

出口王仁三郎聖師

王仁三郎と一門の作品展迫る

東京宣教センター次長　森　良秀

「大本一門にはずばぬけた大物がそろっている。これは君ィ、大変な出来事だよ」。

この言葉は、篆刻家・画家・陶芸家・書道家・漆芸家・料理家などの様々な顔を持つ北大路魯山人の口癖だったという。

その一門のお作品展の開催が迫ってきた。「古今独歩　魂の煌めき～耀盌と書画～」を宣伝文句に、平成二十五年一月六日から一月十二日までの七日間、東京都北区の〈北とぴあ〉を会場に開催する。

世間からは、思想家・芸術家とも呼ばれる大本教祖出口王仁三郎聖師は、芸術と宗教の両者は根源を一にしていると説き、宗教の理想を芸術に顕現すべく、生涯をかけて陶芸や書画など、膨大な芸術作品を残した。とりわけ楽焼茶盌「耀盌」は、聖師最晩年の昭和十九年暮れよりわずか一ヵ年余りの間に三千点余りも造られた。

本展の開催は、首都東京から、芸術・文化の振興を図るとともに、これらの情報の発信を通して、東日本大震災で罹災された人々を含めて、多くの日本人に「美」の世界から、生きる力と勇気を提供できればと願っている。

東京で一門のお作品が一堂に展観できるのは、昭和四十九年三月椿山荘美術館での「大本芸術作品展」以来、実に三十八年振りである。初公開のお作品もあり、この機会に友人知人を誘って鑑賞いただければ幸いである。

開催初日の六日には、ＮＨＫのＥテレビが午後九時から九十分間、日本人の近代思想の歩みを描く大型シリーズ番組「日本人は何を考えてきたのか」の第九回、『ひろがる民衆宗教～出口なお・王仁三郎と大本教事件～』と題して大本を取り上げる。

大本の思想（ＮＨＫ番組）と芸術（一門の作品展）が奇しきめぐり合わせを得て、国祖のご再現を祝う節分大祭を前に同時に紹介される慶事は、開教百二十年記念行事の掉尾を飾るにふさわしい。

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」より

今求められる食・農・環境

―今こそお土のこころを―

講師 島本光久（しまもとみつひさ）
（[社] 愛善みずほ会理事）

何百万の金より一握りのお土

大本の教祖・出口なお開祖は、『何ほど金を貯て歓んでおりても、まさかの時には、金銀では生命が継げんぞよ』『百万円の金よりも一握りのお土のほうが、どれだけ大切か分からぬ』と、お筆先（大本神諭）の中で、拝金主義を戒め、お土の大切さを示されました。

またもう一人の教祖・出口王仁三郎聖師は農業について、『人間は、一生の間に、少しでも百姓をしておかないと、人生の妙味は味わえない』と示されています。

現代の人々は昔に比べ、農業に携わる人が格段に減りました。それにともない、お土に触れる機会が減り、〝お土の尊さを知る〟ことができない人が増えています。

社団法人「愛善みずほ会」は、昭和二十三年に大本と長野県の稲作指導団体の「瑞穂会」が協力提携し、出口すみこ大本二代教主が初代総裁となって創設されました。

天地の恵みに対する感謝の心を第一義に、土づくりと天産物自給による農法運動を基軸に、現在活動を展開しています。

日本の農業の歴史とみずほ会

昭和二十六年ごろ、戦後の肥料不足と重なり、急速に化学肥料を使用した農法が盛んになりました。食料不足もあった当時、日本にとっては本当に願ったものであり、化学肥料は日本の農業に大きく寄与しましたし、これからの農業事業における一つの大きな希望であると考えられていました。

しかし、化学肥料に傾倒し過ぎたことによって、土壌汚染などの弊害を生むことになったのです。

私の祖父で、当時愛善みずほ会の専務理事を務めていた島本覚也は、直感的に自然の法則から考えて、化学肥料に偏ってしまうことに非常に危機感を感じました。この考えは時代の流れに反していると、圧力を受けたこともありました。

愛善みずほ会はその活動の中で、従来の有機肥料と堆肥を使った有機農業の技術を突き詰めていきました。それが「愛善酵素農法」という微生物農法です。

また覚也は、王仁三郎聖師とすみこ初代総裁から、酵素農法の研究をするようとのご教示を受け、その研究に専念するために、別団体として「酵素の世界社」を設立。現在この「愛善みずほ会」と「酵素の世界社」が両輪となり、日本国内はもとより、中国、韓国、東南アジア等で、土作りを基準とした農業技術の普及を展開しています。

自然の摂理を考えて

実際、有機肥料を使っても化学肥料を使っても、姿形は同じ野菜ができますが、栄養価に差が生じました。

北海道中央農業試験場の調べによると、化学肥料が入ってきた初期の一九五〇年代のホウレン草には、一〇〇㎎あたり一五〇㎎のビタミンCが含まれていました。それが年々と減り、今から約二十年前の一九九四年には八㎎にまで減りました。

また立命館大学の久保幹教授の調べによると、有機栽培の野菜と化学肥料で栽培した野菜の成分を調べたところ、硝酸塩濃度に大きな違いがあることを発見されました。

硝酸をたくさん含んだ野菜を食べ続けると、血中に酸素を運ぶヘモグロビンがメトヘモグロビン血症を引き起こし、血中に酸素が運べなくなり、身体が酸欠状態になるという報告もあります。

実際、アメリカでは今から三十年ほど前に化学肥料を大量に蒔いた牧草を食べた牛が、バタバタと倒れる事例が報告され、日本でも乳幼児のメトヘモグロビン血症の発症により、化学肥料の多量使用が問題となりました。

化学肥料が盛んになった一九五〇年代は、「土」は〝生命〟であるという見方から〝物質〟という見方に変わってしまった転換期であり、ゆえに土壌荒廃が進んでしまいました。

そして二〇〇〇年代に入り、土壌荒廃からくる作物の病気から脱するために、土自体を使わずに、半閉鎖的な建物の中で、太陽光線に替わる電気照明や空調設備を用い、化学肥料だけで養液栽培する植物工場が注目され始めました。

発電所で起こした電気を使って植物を育てるため、地球のエネルギーの物質循環から考えると、かなりの負荷がかかっていることになります。この方法も自然の摂理から考えると外れています。

植物工場の研究そのものは、人類がこれから宇宙へ旅立つ時代に向けて、宇宙ステーションで野菜を作るための技術など、未来には必要になってまいります。その研究を否定するものでは決してありません。

しかし、地球上で農業を営む私たちは、従来の大自然の恵みのもとで栽培する土耕栽培をすべきではないでしょうか。地球の物質循環からすると、自然の太陽光線を使い、土の上で農業を営むことこそが自然の流れなのです。

食料自給率増加のために

日本の食料自給率はたった四十％です。先進国の中でここまで低いのは、日本しかありません。

食料自給率を上げるためには、農家だけが努力するのではなく、日本国民全員が重要な問題として考えなくてはいけません。

この食料自給率を上げるために大きな力を持っているのは、実は家庭菜園です。

一九六二年、キューバではアメリカとソ連の冷戦によるキューバ危機が起こりました。冷戦以前のキューバは、ソ連や東欧諸国から食料を輸入していて、食料自給率が現在の日本と同じように低い国でした。

しかし、そのキューバ危機で、食料が一切入ってこなくなってしまったのです。その時に、キューバ政府は農業に従事していない人に対して家庭菜園を推奨し、余っている農耕地を開放しました。そして耕作した土地は、それぞれの所有地にしても構わないということを約束しました。このこと

で食料自給率を一気に一〇〇％に引き上げたという実績があります。

各自が家庭で食べる分だけの食料を栽培する。それだけでも食糧自給率は上がります。都会でもプランターで栽培することは可能ですので、植物に触れる機会を作っていただきたいです。根菜や葉菜類から始めると、失敗が少なくて楽しみながら取り組みやすいと思います。

堆肥による土作り

土（土壌）は直径二ミリ以下の砂と粘土からできています。この砂と粘土は人間でいう骨格のようなものですが、これだけでは私たちの体が動かないように、生命を持って動かすために、動物の死骸や残根などの食物残渣といった未分解有機物が必要になります。

さらに土を活性化させるために重要なものが〝腐植〟と言われるものです。腐植とは人間でいうところの筋肉です。

ホームセンターなどで「腐葉土」が売られていますが、この腐葉土には腐植になる前の物質がたくさん含まれています。落ち葉が堆積して、それが腐植に変わる直前の黒々とした物質、それらが腐植に変わるのです。

堆肥は、腐植を積極的に蓄積させるために入れますが、土が十分に完成するまでには五年、十年と長い年月を要します。この腐植が土の物理性、化学性、生物性を改善して、植物の根の働きを助け、成長を促進するという摂理が営まれています。腐植がきちんと蓄積した状態では、土が黒々とし、柔らかくフカフカとした状態になります。

こうすることで十分な水分や空気で隙間ができ、植物が大地に根を下ろす構造を作ることができます。植物にとってより良い環境を作るために、土作りは大変重要なのです。

積極的な発酵食品の摂取を

酵素とは全ての生物が生命維持に欠かせない、タンパク質でできた物質です。微生物はエサの有機物を分解する時に、対外に放出します。私たち人間は体の中で作られるアミラーゼやプロテアーゼなどの各種体内消化酵素を有していますが、発酵食品からも取り入れることで健康維持を補助しています。

発酵食品には味噌や麹などがありますが、その発酵メカニズムは堆肥も食品も同じです。

一般農家の方には有機物が腐れば堆肥になるとお考えの方もいらっしゃいますが、腐った食品は食べられないように、堆肥も腐敗したものは用いることはできません。

愛善みずほ会では、発酵させるという見地から堆肥、有機肥料の研究をしています。

例えば、堆肥や肥料を発酵させて、土壌中の病原菌と戦ってくれる微生物を培養すると、細菌は一グラム中に約五億から十億という数で発生し、土の温度は約五〇～六〇度まで達します。

それにより堆肥からは良質な腐植が作られ、土を柔らかくするだけではなく、植物の根にとって非常に良い物質をたくさん作り、それが農業分野における発酵の技術に貢献しました。

また食品分野においても発酵食品は、整腸効果をもたらすなど、注目されています。

生の大豆を食べても、腸は全く消化せずにそのまま排泄されます。消化を促すために、柔らかく煮たりしますが、それでも六、七割程度しか消化できません。そこで発酵処理を施して、味噌や納豆にすることで、一〇〇％に近い形で消化できるようになります。

同じ物を食べても、より高い栄養価を得られることが、発酵食品の良いところです。

消化が促進されれば、お通じが良くなります。便の半分は、食物の消化しきれなかった繊維質で、あとの半分は腸内細菌の死に殻です。昨今、その便の量が戦前の三分の一に減っていると言われています。これは私たちのお腹の腸内細菌が減っている証拠なのです。

このことは自己免疫力の低下とも関係していて、喘息やアトピーなどのアレルギー性の病気が増加しているのは、腸内細菌の減少が大きな要因であると言われています。

これからは無菌、除菌などで菌を排除するだけではなく、腸内細菌を増やし、自己免疫力を高める発酵食品を積極的に摂取することが大切になってきます。

神秘の力が働いている

昨年の八月から九月、そして今年の七月から八月にかけて、福島県の計画的避難地域となっている伊達郡川俣町で土壌中のセシウムと微生物の因果関係について調査しました。

現代科学や物理学からすると、放射能、特に土壌中のセシウムを微生物で分解することは不可能と言われています。

そこで、土を微生物で発酵させて、一カ月間処理したらどうなるかを実験しました。

結果は、残念ながらセシウムの量にほとんど変化はなく、微生物による発酵だけではセシウムは分解できませんでした。

しかし興味深いことに、完全密閉されていて、上からも下からも土中のセシウムの移動はないはずの状態にも関わらず、二回の試験とも処理前と処理後の量がわずかながら減少していました。土の中に微生物以外の、神秘の力が働いているのではないかというような結果が出てきたのです。

これが何かと言われても、現代科学では説明できません。しかし数値が下がる要因がやはり〝何か〟あるという感触がありました。

セシウムの半減期は三十年と言われていますが、私は三十年もかからずに、非常に良いテンポで下がっていくのではないかなと期待を寄せています。

広島、長崎の原爆も、当時はしばらく不毛の地になると言われていましたが、数年後には予想以上に放射線量は下がっています。

これについて王仁三郎聖師は『何かの力が働いている』と述べられたと聞いています。今回の実験でも自然の治癒力の中にある〝神秘の力〟が働いているという感覚を得ました。

お土に触れる生活を

今は競争社会で多くの日本人がストレスを抱えていて、ライフスタイルを見直す時期に入っています。

食事もスローフードの時代に還り、ゆっくりとした社会生活に戻るべきです。その中でも農業のある暮らし、お土や植物に触れることが、生活のリズムを改善してくれるきっかけになるのではないかと考えます。

そして『百万円の金よりも一握りのお土のほうが、どれだけ大切かわからぬ』というなお開祖のお示しが、今こそ世に問われる時代ではないでしょうか。

古今独歩

魂の煌めき
耀盌と書画

出口王仁三郎とその一門の作品展

2013年 1月6日［日］→1月12日［土］ 開館時間＝午前10時～午後7時（入館は午後6時30分まで）

北とぴあ 地下1階展示ホール 〒114-8503 東京都北区王子 1-11-1 TEL 03-5390-1100
JR 京浜東北線王子駅北口徒歩 2 分、東京メトロ南北線王子駅 5 番出口より直結

主催＝「出口王仁三郎とその一門の作品展」実行委員会　後援＝東京都、産経新聞社

開教120年東光苑秋季大祭

開教百二十年東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣りは十一月十一日、午前十時三十分から、斎主・出口文営大本楽天社代表のもと執行され、四百二十人が参拝した。

祭員は関東教区各主会の祭務部長、少年少女祭員は山梨主会の小池翔音くんと東京主会の土方清美さん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は中嶋浩山梨主会長、添釜は村井社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、十一月四日に梅松苑で執行された『開教百二十年大本開祖大祭』と、同祭典後に道院台湾総主院の一行が執り行った檀訓（フーチ）で『圓充達化』のお示しが東京本部にご下付されたことなどを紹介。「圓が充実し目標達成するよう、信徒は身魂を磨き、仲よく和合して、み教えや信仰の喜びを宣べ伝えなければならない」とのべた。

続いて斎主を務められた出口文営大本楽天社代表があいさつ。最近の教団にまつわる話題を紹介。新聞や一般誌、またNHK等で大本が紹介されることにふれ「歴代教主・教主補さまの姿に学びながら、自分にできる立替え立直しの実践しなければならない」と強調された。

最後に藤本和治南米本部特派宣伝使があいさつ。開教百二十年を慶祝し、南米本部の信徒が今年一年を通じて四十六人が聖地参拝したことやブラジル宣教の歴史などを紹介した。

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百十七回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る』は、十一月二十一日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において、森良秀東京宣教センター次長を講師に「人は何のために生きるのか―人生にとって大切なもの―」と題して開催された。参加者は三十一人（内、一般十六人）。

講座では、現代社会の問題点に触れながら、人はなぜ生まれたのか、神と人との関係、霊魂（心）の働きなどについて解説したほか、信仰の大切さを説いた。「一霊四魂を磨くこと、神さまから無限の神徳を受けられるように努める。自己の運命を積極的に開拓していく。そしてこの地上に天国を建設する神業に参加することこそが人生の本分である」と結んだ。

参加者からは、「善事をなすことが生きる目的と考えると、気持ちが楽になりました（四十三歳・男性・一般）」「一霊四魂の教えは、他宗教の教えよりも納得できました（五十五歳・男性・一般）」などの声が寄せられた。

東光苑主催 祭典・行事予定

平成24年12月

9日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

12日（水）
作品展チラシ・招待券街頭配布活動

16日（日）午前10時30分
開祖聖誕祭（176年）

19日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」
講題　今を幸せに生きる
―運を開く5つの鍵―
講師　浅田秋彦（東京宣教センター長）
会場　航空会館（港区新橋1―18―1）

25日（火）午前10時30分
出口日出麿尊師毎年祭（21年）

26日（水）
作品展チラシ・招待券街頭配布活動

平成25年1月

1日（火）午前7時00分
新年祭

1日（火）～3日（金）
年賀

6日（日）～12日（土）
「古今独歩」出口王仁三郎とその一門の作品展～魂の煌めき耀盌と書～
会場　北とぴあ（北区王子1―11―1）

13日（日）
東光苑月次祭・成人式式典

16日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題　大本の神示と世界の将来
―人類の予言と警告―
講師　出口眞人（大道場講師）

19日（土）
聖師毎年祭（65年）